

新刊紹介

東京経済大学国際経済グループ著

『「私たちの国際経済」見つめよう、考えよう、世界のこと』(有斐閣ブックス、2003年9月発行、2300円)

●———千葉 隆生

この本は国際経済学の専門書ではない。ましてや、国際経済学の入門書でもない。あえて言うなら、国際経済に興味をもってもらうための入門書である。したがって、国際経済学に関する専門的知識はおろか、経済学に関する知識も全く必要ない。高校生の政経で習った需要曲線と供給曲線の知識があれば、それだけで十分である。その知識だけを使って、外国為替市場の原理を説明するところあたりは見事である。さらに、それから派生して、ラテンアメリカの通貨危機、アジアの通貨危機を極めてわかりやすく説明しており、経済学の知識が全くなくても、この本を読めば、今日の世界経済事情を十分理解できるようになっている。そういう意味では、この本は、経済学の知識が全くない、または、あるけれど余り興味がない人が経済を理解するには、うってつけの本である。

この本は大きく第一部と第二部に分かれている。第一部では、最近流行りのトピックを通じて、国際経済との関わりを示しており、第一章は、経済統合と国際貿易について、第二章では、金融グローバル化と通貨危機について、第三章は、IT革命と世界経済、第四章は、地球環境問題と各国の対応、第五章では、人口問題と食糧危機、第六章は、貧困と開発問題、が取り上げられている。いずれも、最近よく耳にするトピックであり、それらを通じて、国際経済との関わりをわかりやすく説明しており、国際経済に興

味の無い人でも、比較的すんなりと国際経済への理解を深められるようになっている。

また、第二部では、地域別の経済事情が示されており、第七章ではアメリカを取り上げ、アメリカ経済の停滞と復活について言及している。第八章ではヨーロッパを取り上げ、EUの統合問題とトルコの加盟問題などについて、わかりやすく言及している。第九章では日本を取り上げ、高度成長から低成長への転換、バブルとその崩壊、そして世界の中の日本について言及している。第十章はアジア NIEs を取り上げ、アジア NIEs の歴史と工業化成功の理由、そして各国経済の事情について言及している。第十一章はアセアンであり、アセアン諸国の現状と問題点について示している。第十二章は中国であり、アヘン戦争から近代化、最近の沿岸部のメガロポリスにまで言及している。最後の第十三章ではロシアを取り上げており、ソ連の成立から崩壊、そして市場経済化と豊富な天然資源の開発にまで言及している。

いずれの章も、わかりやすい言葉で丁寧に説明されており、専門用語は何一つ使っていないにもかかわらず、非常に丁寧でわかりやすい内容となっている。経済または国際経済への導入書として、一年生科目や共通科目、また経済学にアレルギーをもっている人に対して、導入本として使うには、最適な一冊ではないだろうか。

.....